郷土史への扉

造営三百年 霧島神宮 その❹

霧島神宮が正徳五（一七一五）年に現在の地に造営されてから、今年で三〇〇年を迎えました。これまでは霧島神宮の由来や造営の経緯、社殿の構造（配置）について紹介してきましたが、今回は霧島神宮に伝わる郷土芸能について紹介します。

霧島神宮田の神舞

霧島神宮お田植祭り

霧島神宮お田植祭り

霧島神宮のお田植祭りは、旧暦二月四日に、神宮の境内を舞台に行われています。祭りの前日に境内の一角に忌竹を立て注連縄をまわして、※1四間四方の※2斎田が作られます。

当日は、本殿での祭典が終わると、斎田で柴引き（鉤引き）が始まります。柴引きは、十数人の柴引き役が登場し、椎の木の股を引っかけて二手に分かれて引き合います。椎の木の股が引き裂かれると、小枝をちぎって斎田にばらまき、水田に見立てます。

次いで、面を付けた翁と媼、黒牛が登場して田打ちと田すきを方言でおもしろく表現します。

田打ちが済むと、神職が四人登場して、天津祝詞を奏上して籾蒔きを行います。続いて二人の神職が、榊の小枝を苗に見立てて田植えを行います。

田植えの行事が終わると、「田の神」が登場します。田の神は、腰を曲げてゆっくり登場すると斎田の中央に立ち止まり、メシゲ（しゃもじ）を杖のように突いて長い口上を述べます。

口上は、「こん田の神は、霧島神宮の御田の神様でございます」「今日は、旧の二月四日、霧島さあの田植えで、こん田の神にもでっけちいいやったので（出てこいと言われたので）、今ようようまかり出申した…」

といった調子で始まり、最後には、自分の外観のみすぼらしさを述べて見えを切りゆっくりと退場します。

世襲と奉仕団体

お田植祭りは神宮祭儀の中でも特に重要視され、古来より大祭の一つとして、早くから保存会をつくり、伝統の保持に努めてきました。毎年行われる伝統的な芸能だけに神宮職員を除く、田遊の翁、媼、牛役と田の神役は、年齢は問いませんが世襲的に家柄が決まっています。これに対し、鉤引きをする青年たちは「霧島みやま会」で神宮の奉仕団体が担っています。

近世からのお祭り

この芸能で使われる仮面は、牛面が宝永三（一七〇六）年、翁面が宝永九年、媼の面は安永元（一七七二）年の銘があります。現在の社殿造営の時期と重なることから、お田植祭りは社殿焼失以前からあったのか、火災を契機として再建を願って新たにお田植祭りを取り入れて民衆に喚起したのか、今のところ特定できませんが、少なくとも今から三百年余も前に、お田植祭りが斎行されていたことは間違いありません。

お田植祭りと社殿造営

霧島神宮のお田植祭りは、境内を田に見立てて耕し、緑肥になる※3刈敷を入れ、種播きや田植えまでを模擬的に行う春祭り（予祝祭）です。

この祭りは県内に分布している田植祭りの中でも非常に儀式化され、洗練されたものであり、祭りの終りに独特の田の神舞が舞われますが、これは県内の田の神舞の原型の一つを示すもので非常に貴重なものとなっています。（県指定無形民俗文化財・平成三年）

さらに注目すべきことは、登廊下の東側の境内でお田植祭りが行われることです。『三国名勝図会』の絵図では登廊下の西側には神饌所があり、東側は勤行所が配されています。登廊下を挟んで西側は神前に供える神饌を調理する所で、東側は回向する所、すなわち祈りを捧げる所となっています。

お田植祭りは、瓊瓊杵尊が稲の種子を持って降臨し耕作されたという故事により、神苑内に祭場を設けて五穀豊穣を祈願する祭りです。登廊下の東側の斎庭で行われることからも、霧島神宮社殿の配置は造営時からこの祭りを意識して造られたことがうかがえ、大変興味深いです。

（文責＝鈴）

※1 一間は約180㌢（四間は約7㍍20㌢）　※2 神前に供える米を作る田　※3 草木を刈り田畑に敷き肥料にすること